【特別講演Ⅱ】

「いよいよ始まる働き方改革　内視鏡センターにおける運用マネジメント」

講師　社会医療法人　友愛会　友愛医療センター
消化器内科部長　加藤　功大
座長　琉球大学病院　　光学医療診療部
金城　　徹

私の勤務している友愛医療センターは現在年間総内視鏡検査数6,500 ～ 7,500件（胃内視鏡検査3000件、大腸内視鏡検査3000件、ERCP関連手技450件、胆膵EUS 350件、各種ESD 100件程度）を実施している急性期病院です。加えて近隣に法人内施設として健康管理センターを構え、年間15,000件の人間ドックとしての胃内視鏡検査を一部支援しています。10年前には当院の消化器内科医は病院内でもっとも帰宅時間が遅いといわれ、特に内視鏡センターでは検査が延長し、連日の残業が問題となっていました。働き方改革という言葉もない中、スタッフの疲弊は離職につながり、内視鏡センターの検査運用は効率化が求められていました。そこで私たちは次のことに取り組み、現在では内視鏡センターの業務をほぼ定時勤務時間内に終了することができるようになっています。

(1)検査の固定当番制廃止、(2)各医師のスケジュール管理と検査枠への反映、(3)スタッフ数を考慮した年間目標検査数と検査枠の設定、(4)内視鏡業務の見える化、(5)夜間・休日の緊急検査対応ルール策定、(6)内視鏡検査における病診連携の構築

昨今の医師や看護師の人材確保が難しくなってきている状況において、業務量を調整するためには標準化や平準化だけでなく、スタッフの多能工化や院内外におけるタスクシフトが必要となってきます。処置系内視鏡検査の需要増大と医師の働き方改革の本格導入も相まって、内視鏡センターのこうした効率的運用は必須と考えています。

今回はこうした運用改善に取り組んだ内容を紹介します。